

# 異彩を放つ構造家

安藤耕作

朝倉幸子◎TH-1

illustration: TACO

## ■徐光学校

安藤耕作さんは7年間、文字どおり建築をゼロから習得した人である。祖国中国で建築を生業とし活躍してから来日し、今日、日本の構造家の中枢としての立場を確立している構造家の徐光さん（本コラム57回に登場）が師である。徐光さん主宰の構造設計事務所JSDに入所して初めて、「建築に、構造設計という分野があること」を知ったと素直にいう。1980年大阪府枚方市生まれで、高校卒業のころには「世界を制する美容家」になると決めていた。美容専門学校では、男性は希少であることもあり、美容界で成功できる確信を得たのだという。ニューヨークへ行って腕を磨こうかと考えたりもするが、なぜか「この延長線上の人生でよいのか？」と疑問が湧いてきたという。決まりかけていた道を捨てて日本を離れ旅に出たのだった。そして、建築の魅力に目覚めたのである。

そんなとき上海で知り合った徐光先生の娘さんに、父親が設計事務所をしていると聞いて紹介してもらい。熱烈な求職の手紙を書いた安藤さん。無経験でも採用した徐光さんの琴線に触れた何かがあったらしい。そうはいっても、できるのは事務所の掃除と図面と計算書の整理くらいであると自覚している。毎日それをやり続け、師の代表作の中野坂上のサンブライトツインの図面や計算書は、どこに何が書いてあるかまで把握したという。夜に設計図や計算書をトレースして、翌日疑問点を聞くと親切に教えてくれた先輩がいたのは幸運だった。そのうち、コンサートの舞台装置の設計担当者として現場に放り込まれ常駐した。わからないことばかりだったが師の指示



を仰ぎながら、なんとかやり遂げた。こうして2年経ったころには「建築構造をなんとかやっていけそうだ」と思うまでになる。覇志堂が「凄い！」と唸るのも本心から。事務所での携わった仕事の幅は広くて、草間彌生の南瓜アート（直島）は人が入れるGRCとして初めて確認申請を取ってつくったものである。

## ■温故知新

JSDを辞して、韓国のMIDAS（解析プログラムのメーカー）に所属していた時期もある。それまで本格的に構造をしてきたから、顧客である構造家たちとの関係もつくりやすかった。今も大事にしている人脈をつくることができたという。そして、娘さんが生まれたこともあり、日本を本拠地にしようと2015年に独立したのだった。

JSD時代にはひたすら蔵書を読んで建築と建築家を覚えたという。なかでもイタリアの建築家であり構造家のピエール・ルイジ・ネルヴィに惹かれる。同じ6月21日生まれなので、「もしかしたら生まれ変わりかもしれない」というまで。ローマのスポーツパレスの前に立ったときには「震えが来た」と話す。鉄筋コンクリートを主要な構造材料にしたネルヴィの建築概念だけでなく、服装にも影響を受けている。ネルヴィはダブルのスーツしか着なかつた。安藤さんもジャケットはダブルしか着ないと決めているのです。

安藤さんのこだわりの根底には音楽がある。趣味の域を超えたジャズレコードマニアでもあり、マイルス・デイヴィスの大ファン。建築の中には音楽があつて、音楽の中には建築があるのだという。実際に建築をつくるうえでの分担に対しての考えも同じで、意匠設計も構造設計も施工もひっくるめて、みんなで楽しく！つくっていきたいと思う。

複数動かしているプロジェクトの中でカンボジアのプノンペンでは、120mの超高層が建設中だ。かつて、美容で自分の未来を描いた安藤さんは、今建築という大きなベースの中にすべてを取り込み、さらに大きな流れを掴むもくろみだ。過去も未来も、フィールドや立ち位置も超えて、コーディネートできるこれからの構造家だ。